

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月3日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530909

研究課題名（和文） 教室におけるジェンダー秩序の日瑞比較研究

研究課題名（英文） Comparative study on Gender order in schools in Sweden and Japan

研究代表者

中澤 智恵 (NAKAZAWA CHIE)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：00272625

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本とスウェーデンを比較検討することによって、義務教育段階の学校における教室内のジェンダー形成およびその教室環境や社会・文化的背景を明らかにすることを目的とする。日本の小・中学校の授業はスウェーデンの個別学習主体とは異なり教師主導型で、授業場面では児童生徒の個性やジェンダー秩序は表面化しづらい。しかし、生徒が学校外から持ち込むジェンダー・パターンへの介入は十分なされているとはいえなかった。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to explore the gender order and gender patterns in the classrooms of compulsory schools and their social and cultural backgrounds in comparison with Sweden and Japan. The findings of interviews and observations at schools show that classes in Tokyo are teacher-centered, and well planned and controlled by teachers, while activities of individual learning are dominant in the classes in Sweden. In these circumstances, children's individualities and gender patterns are not much visible during lessons in Japan. Intervention in gender patterns which children bring into the classrooms from outside schools doesn't seem to be sufficient both in Sweden and Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：教育社会学・社会教育学

科研費の分科・細目：教育社会学

キーワード：ジェンダー、スウェーデン、学校、教師－生徒関係

1. 研究開始当初の背景

これまで、ジェンダーと教育研究、とりわけ学校教育の分野では、教育達成に関わる研究蓄積がなされ、ジェンダー・トラックの存在などが指摘されるなどしてきた（中西祐子『ジェンダー・トラック』東洋館出版社、1998

年）。さらに、1990年代以降、質問紙調査等の量的調査に加えて、教室観察などエスノグラフィックな質的調査にもとづいた研究も積み重ねられ、「隠れたカリキュラム」の問題が明らかにされてきた（宮崎あゆみ「学校における『性役割の社会化』再考－教師によ

る性別カテゴリー使用をてがかりとして」『教育社会学研究』第48集、1991年、木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房、1999年など。現時点においては、そうした学校内、教室内のジェンダーに関わる諸課題にどのようにアプローチしていくのか、ジェンダー平等教育へのコンセンサスおよび、教育方法や授業例などの具体的な提案や計画が求められているが、十分に実践研究が展開されているとは言い難い。

一方、欧米諸国では、学齢期の男子の学業不振や教育アスピレーションの低下などの問題に直面し、男性学や男性研究が注目されるようになってきた (Epstein, Debbie. et al(eds.), 1998, *Failing Boys?: Issues in Gender and Achievement*, Open University Press ほか)。また、男女というジェンダー間のみならず、ジェンダー内の分化や、階層・エスニシティといったインターセクションの問題に着目されるようになってきている (Thompson, Jane, 2000, *Women, Class and Education*, Ucl Pr Ltd, Skeggs, Beverley, 1997, *Formation of Class and Gender*, Sage Publications)。

日本においては、男子により多いとされる学校不適応の問題や、学校や地域、家庭環境の違いによる学力格差の問題などが指摘され、欧米と同様の問題が生じていることがうかがえるものの、ジェンダーの観点からの分析考察は未だ十分とは言えない。例えば、PISA2006の科学的リテラシーの分析結果から、日本においては、科学的リテラシーに対する社会経済的要因の規定力は他国に比べて小さいが、学校間格差は比較的大きいことが指摘されている (OECD, 2007, *PISA 2006: Science Competencies for Tomorrow's World*)。こうした国際的学力調査の結果に関する詳細なジェンダー分析は、日本ではあまり十分に取上げられていない。以上の点から、教室内のジェンダー関係のインターセクションをふまえた現状分析と、教室をとりまく社会文化的背景要因について、ジェンダーの視点に基づいた研究を進めることが求められているといえる。

研究代表者は、福島県男女共生センター平成17・18年度公募研究「学校教育におけるジェンダー平等戦略 ～教育環境と教育内容に焦点をあてて～」によって、福島県、東京都、神奈川県の小・中学校の児童生徒および教師に対する質問紙調査を実施し、教師・児童生徒のとらえる教室における教師—児童生徒関係、および児童生徒の教室内の勢力関係を明らかにした。しかしながら、質問紙調査という研究方法上の制約から、対象者の認識を明らかにしなくても、双方の認識のずれがどこから生じてくるのか、実際には

なにが生じているのかには到達できなかった。そこで、学校・授業観察およびインタビュー調査等の質的調査をもとに、よりインテンシブな調査研究を実施すべきとの研究課題の設定に至った。

他方、近年、理科離れが問題となり、PISAなどの国際学力調査の結果から、日本の小中学生の学力の問題が非常に重要な課題となっている。この課題に関して、研究代表者の「理科教育・学習におけるジェンダー」の研究によれば、学校におけるジェンダーの問題として、各々の教科が抱える課題や、教科の性質に応じた有効なアプローチを検討する必要性が指摘された。

さらに、研究代表者の平成19年度における国際研究交流によって、ジェンダー平等がもっとも進んでいるとされるスウェーデンにおいても、フェミニニティーズやマスキュリニティーズが大きな課題となっており、日本と共通の問題関心を有していることがわかった。

以上述べてきたことから、日本の研究動向と申請者のこれまでの研究成果を通して、男女それぞれのジェンダーグループ内においても、社会文化的要因や地域・学校・家庭環境による分化・層化が進んでおり、そうした規定的要因を明らかにするとともに、ジェンダー平等に資する教育実践の方法を開発する実践的研究が肝要である。

2. 研究の目的

本研究は、義務教育段階の学校（小・中学校レベル）における教室内のジェンダー形成およびその教室環境や社会・文化的背景を、日本とスウェーデンにおいて比較検討することによって、日本の男女平等教育の課題を明らかにし、教員養成および教育実践支援プログラムの開発に資することを目的とする。研究方法として、これまでに日本とスウェーデンで実施された質問紙調査による先行研究を基に、教師—児童生徒関係および児童間や仲間集団内の関係、児童生徒のソーシャル・キャピタルに関する観察およびインタビューという質的調査を実施する。

3. 研究の方法

日本（東京都）とスウェーデン（ヨーテボリ、リンショーピン、ノルショーピン）において、海外共同研究者とともに、小・中学校（義務教育段階の学校）の授業観察およびインタビュー調査を実施し、異なる文化的視角からの分析・考察を通して、教育におけるジェンダー実践に関する暗黙知を明らかにする。具体的には、①先行調査研究を再分析し、日瑞の諸特徴を明らかにする。②学校を対象に教育環境・カリキュラムについてインタビュー調査を実施する。③学校の授業・休み時

間の観察を実施する。④学校教師へのインタビュー調査を実施する。

海外共同研究者は、ヨテボリ大学教育学部の Inga Wernersson 教授, Eva Gannerud 准教授, Annete Helman 専任講師である。

4. 研究成果

(1) 平成 22 年度

初年度においては、①スウェーデンにおける「学校教育とジェンダー」研究の情報収集・検討、②スウェーデンの「ジェンダーと教育」研究者およびジェンダー教育者(ジェンダー・ペダゴグ)へのインタビュー、③調査協力校の開拓・調査依頼と打ち合わせを行った。

①「ジェンダーと教育」研究に関しては、スウェーデンにおいても「男の子」問題が焦点化されつつあることを把握しえた。同時に、教室観察に基づく研究もとりわけ博士論文で蓄積されている。

一方、国レベルでの、教育を通じたジェンダー平等に向けたプロジェクトも実施されている。ジェンダー研究センターの発行する研究情報・広報誌 Gender research in Sweden 2009 において、'What is gender pedagogy' という特集タイトルが組まれていた。そのなかで、2003 年より進められていた Deligation for Equality in Preschool というプロジェクトに関連して、ストックホルム大学の Hilleve Lenz Taguchi 教授が「プリスクール(幼稚園・保育園)の教師のほうでジェンダー平等の教育実践にとりくみやすい。それより上級学年の学校(基礎学校や高校)の教師は、より個人主義的ベースに立って仕事をしているので、子どもの学習やアイデンティティの発達をインテグレーションの問題としてみなさない」と述べている。

このプリスクール(幼稚園・保育園)段階でのジェンダープロジェクトはすでに終了しているが、その後、DEJA という学校教育におけるジェンダープロジェクトがスタートしている。この DEJA では、いくつかの研究報告書が刊行されている。これらの報告書はインターネットの Web 上に公開されており、PDF ファイルによってダウンロードすることが可能である。

②インタビューにおいては、ジェンダー・ペダゴグの養成および役割を中心に尋ねた。

スウェーデンでは、現職教員の継続教育として、大学において正規の単位・資格認定を伴うコースの形で、スキル・専門性向上のための様々な研修機会やプログラムが提供されている。そのなかで、ソーシャル・ペダゴグ(特別支援教育者)が学校において、諸

課題はあるものの、専門職としての一定の位置づけを獲得しえたのに対して、ジェンダー・ペダゴグの養成コースは数年の試行にとどまり、現在では停止してしまっている。とはいえ、養成されたジェンダー・ペダゴグは、自治体によっては教員対象の研修コーディネータとしての役割等を担っている。

ジェンダー・ペダゴグとは、学校でのジェンダー平等を推進するために何をなすべきかを検討し、その仕事を組織しコーディネートする役割を担う専門職である。2003 年から 2005 年の秋にかけて、ヨテボリ大学とウメオ大学にて養成コースが開講された。しかし、各自治体に一人のジェンダー・ペダゴグを置くという政府の目標達成には程遠いとされる。どのようにこのコンピテンスを使ってよいのかわかっていない、というのである。ジェンダー・ペダゴグは、ジェンダー・ブラインド→ジェンダー・アウェアネス→ジェンダー・アクティブへと意識や態度の変容を促すものであるというが、実際には非常に難しい状況にあるといえる。

スウェーデンでは、積極的なジェンダー平等政策が推進され、それが国際的にみて高水準の達成度であると考えられており、学校において取り組むべき課題との認識がやや希薄である。フェミニニティーズやマスキュリニティーズへの問題認識も弱い。そのため、学校でのジェンダー平等教育や教師のジェンダーバイアスへの取り組みは、スウェーデンにおいても困難な課題であることが示された。

ジェンダー・ペダゴグには最終的に 5 人にコンタクトを取り、個別にインタビューを実施した。インタビュー協力者のうち 2 名は、かろうじて現在もジェンダー・ペダゴグとしての仕事をしており、学校に職があることから、次年度の教室での参与観察を実施することに内諾を得られた。

(2) 平成 23 年度

①4 月にイギリスのエクセター大学で開催された Gender and Education Association の研究大会に参加し、日本で行ってきた学校におけるジェンダー秩序に関する研究成果とともに、本研究課題の中間報告を行った。さらに、イギリスを中心としながら欧米におけるジェンダー研究及び「ジェンダーと教育」研究の動向について、研究交流を深めた。

②秋期には、スウェーデン(ノルショーピンおよびリンショーピン)において小・中学校での授業観察および教師へのインタビュー調査を実施した。

対象校は、中学校 1 校、小学校 2 校である。1 つの小学校では、児童数が少ないため、

4・5年生の複式学級を観察した。中学校では社会科の教員の協力を得て、社会の授業を中心に観察した。この公立中学校は、外国生まれなど外国にルーツのある生徒が多く、スウェーデン語がうまく使えず、学習に大きな困難を抱えている生徒が少なくなかった。

観察の結果、小学校でも中学校でも、ドリル作業など個別の学習活動の時間が多く、教師-生徒関係自体が希薄であった。したがって、児童生徒のジェンダー・パターンに教師が介入したり統制したりする場面はほとんどみられなかった。

その中で複式学級のクラスでは、学習のペアを組ませることがあった。その際に、しっかりした年長の女子と課題のある年下の男子の組み合わせが固定的にみられた。その他の場面でも、しっかりした女子に教師を補助する役割を担わせていた。これらが担任の男性教師にはジェンダーを利用していることだとの認識はなかった。この担任は、この学校で唯一の男性教師で、常に高学年の担任であるとのことで、ここにも隠れたカリキュラムとしてのジェンダーがみられた。

③冬期には、スウェーデンの海外共同研究者3名が来日し、東京都の小・中学校において1週間の授業観察を実施した。公立小学校2校、国公立中学校2校、私立女子中学校1校の計5校である。

④上記②と③をふまえて、年度末に渡瑞し、観察結果のレポートを持ち寄り、分析討議を行った。

日本の小中学校の授業観察の結果、スウェーデン人研究者からは、

1) 日本の学校では、小学校でも中学校でも、授業計画があらかじめよく練られており、教師中心に授業が進められていること、

2) 教師の教授(講義)が授業の大部分を占めていること

3) 児童生徒に割り当てられる課題は共通であり、個人によって異なる(個人の学習計画によってバリエーションがある)ということはまれであること、

4) グループワークが少ないこと

5) クラスサイズが大きいなか、教師は非常によく児童生徒の個性を把握し、授業での指名等、男女が平等な機会を得られるよう配慮している点も見いだされた。スウェーデンの学校では、個別学習の占める割合が多く、教師の介入に限界があることと対照的である。

一斉講義型の授業だから、というだけでなく、クラス全体を一つとして扱うことによって、個別性やジェンダーは遠景に遠ざけられているのではないかと分析された。教師は子どもの個性を見るのであって、性別を見るのではない、という言説は日本だけでなく、ス

ウェーデンでも見られることであるが、日本の学校の授業を見る限り、子どもの個性に合わせて、異なった個別的な対応をとっているようには見受けられなかったという。

6) (とくに理科で見たグループワークでは)ふざけたりする度合いがスウェーデンに比べて少なく、皆真面目に課題に取り組んでいる様子が印象的であったこと。

7) 日本の女子児童・生徒のフェミニニティは、髪型や持ち物等においてスウェーデンよりもジェンダーバイアスが弱いと受け止められていた。

などの点が共通して挙げられた。

このように、教師による統制がよくとれている日本の教室では、多くの場合、教師が公平性やジェンダーバランスに配慮していて、ジェンダーバイアスが現象として表面化する場面が少なかった。しかし概して日本では、児童・生徒の個性の発露が抑えられていることが示唆された。一方で、教師と生徒との関係が密で、教師が生徒の状況をよく把握し、教育的な関わりを持とうとしていることから、今回の観察では明確にはできないが、教師のジェンダー意識や態度が生徒に対して、スウェーデンよりもより強い影響力を有するのではないかと推察された。スウェーデンと日本では授業スタイルが大きく異なっているが、観察からは、学校外で形成される子どものジェンダー・パターンに対して、教師が強く介入しているとは考えにくく、今後の課題といえる。

以上の分析結果とは別に、異なったタイプの授業もいくつか見られた。それは、公立中学校での家庭科の授業と、男女別で行われた保健体育のうち女子の授業、そして、私立女子中学校での能力別編成の英語の授業である。これらの授業は、教師の指示によって、学級集団が統制され、生徒の個性があまり感じられない他の一斉授業とは異なっていたと指摘される。

例えば家庭科の授業に関する解釈は、

I) まず教師のタイプが異なっていたこと。教師が中年の女性であり、雰囲気は他の中学校教師(とくに男性教師)とは異なり、生徒に対して柔和な対応であったとのことである。生徒をリラックスさせる非・権威的態度だと感じられていた。生徒に対して「力」による統制を行っていなかった、ということである。

II) そして、授業内容が調理実習の前の調理の手順の確認であったため、教師が教示用机に生徒を集め、手元を見せながら説明をしたことで、生徒たちが通常の授業よりも身体距離が近く、くっついて座ったことが挙げられる。身体が接触するやいなや、生徒たちは互いにちょっかいを出し始め、またくすくす笑

ったり、なにか話したりということが始まったということであった。

Ⅲ) 三点目は、家庭科という生活に密着した、実習のある教科だからではないか、という指摘である。これに日本人としての筆者自身の解釈を加えると、家庭科という教科は、テストや成績などの点で、数学や英語などといったいわゆる受験教科に比べて、プレッシャーが少ないということも考えられる。生徒自身の授業に臨む姿勢として、良くも悪くも緊張感がやや少ない、ということが考えられる。

以上の要素から、生徒たちが、リラックスした態度であり、生徒同士の相互作用があり、こそこそ話やくすくす笑いが起こるような授業であったのだろう。

(3) 平成24年度

最終年度には、主に次の二点を中心として研究を進めた。

①海外共同研究者と、昨年度に実施した日本での学校観察に関して研究会を開催し、それぞれの観点から討議し報告書にまとめた。

②夏秋授業休業期間を利用して渡瑞し、昨年度に引き続いてスウェーデン・ノルショーピンの小・中学校における学校観察および教師・生徒へのインタビュー調査を実施した。本年度は、生徒および学校教員にインタビューを実施し得たのが研究成果である。また、23年度に観察対象であった学校の一つが統廃合により、対象学年が廃止されてしまったため、生徒が転校した学校を教えてもらい、あらたに2校で観察を行った。

一例を挙げると、中学の体育教師にインタビューした結果、競争的な競技については学校外の地域クラブ活動の場があるので、学校での体育には競争よりも協調を重視しており、男女混合での体育の授業を行っているとのことであった。

昨年度より継続しての観察であることから、対象の生徒（女子のみ）にグループインタビューも実施することができた。その結果、スウェーデンの中流階層家庭の女子にとって、専業主婦の選択肢はほぼ念頭にないこと、性別に平等に対応しない教師に対する反発心が強いこと、友だち関係においてはジェンダーが大きく関わっていることなどを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計1件)

Chie Nakazawa,
Gendered relations in the classrooms in

Japanese compulsory schools,
Gender and Education Association,
Exeter University (U.K.)
27th April, 2011

〔図書〕(計1件)

Inga Wernersson, Eva Gunnard, Anette Hellman, Chie Nakazawa,
“Gender patterns in Japanese classrooms; exploratory observations in some schools in Tokyo, 2011”, 査読なし
May, 2012, 64

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中澤 智恵 (NAKAZAWA CHIE)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：00272625